

季節のおまつり

近江八幡の左義長祭り

琵琶湖畔の滋賀県近江八幡市では、毎年三月中旬に左義長祭りという勇壮な火祭りが行われる。左義長とは、正月の松飾りなどを集めて焼くどんど焼きの別名であるが、ここでは手作りの山車のことも指す。新藁で編んだ高さ三メートルほどのどっしりした三角錐の松明を中心には、赤い短冊や薬玉、扇などが華やかに飾られ、正面にはその年の干支にちなんだ造り物が据えつけられる。これに丸太のかつぎ棒を取りつけ、御輿のようにして、

「チヨウヤレ」、「マッセマッセ」の掛け声と共に旧町内を練り歩く。

この祭りの縁起は戦国時代の末期にさかのほる。秀



左義長同士の「組み合わせ」

午後からは、日牟禮八幡宮の馬場に集まつた各町内の左義長同士の「組み合わせ」が繰り広げられる。若者は力を振りしぼって相手の左義長を倒そうと井桁の丸太棒をがっぷり組み合わせ、観衆も大きな声援を送つて、祭りは一気に盛り上がる。やがて夜八時になつて境内で左義長が順次奉火されると、湖国近江に春を告げる火が夜空を明るく染めてゆく。

（写真・文 宮本卯之助）



日牟禮八幡宮の境内へ集合した左義長

赤坂氷川神社

宮神輿復元新調

前号からの続きとして、復元新調した赤坂氷川神社の宮神輿について、その細部に込めた思いをお話します。

その前に、「宮神輿」と「町神輿」の違いからお話ししたいと思います。元来、お神輿は貴人の乗り物であつた輿に、神様をお乗せしたものでした。奈良時代の七四年、東大寺の大仏開眼の際に聖武天皇の紫色の奉輿を用い宇佐八幡宮の神靈を分けて祀る「勅請」を行つたのがその起源とされています。

そのため、明治時代の頃までは、神輿は神社が保有するものであり、町民は、おどり屋台や山車と言われる曳物で祭礼に参加していました。一六一五年（元和元年）、山王日枝神社の祭礼が江戸城内に初めて入城し、時の将軍徳川秀忠公がご上覧になつたとの説もあり、これを機に江戸の祭りは華やかさを増していくのです。

江戸後期には、城門をくぐつて城内で山車人形を迫り上げる、からくり



宮神輿の堂羽目彫刻

とが困難となつたため、それらの山車は成田や佐倉、栃木や川越といった近郊へと売られていきます。その山車に代わって町で所有するようになったのが町神輿です。

宮神輿の多くは、全体的に落ち着いた装飾で構成された、重厚で風格あるお神輿であるのに対し、町神輿には江戸型山車で培われた豪華さを競う文化が色濃く残つておちなんだ彫刻や彫金、漆工などの細工の豪華さで他町と競い合つて製作されたものが多くあります。

さて、この度復元新調した宮神輿の話に戻りましょう。まずは、戦災で焼失した宮神輿の写真数点と戦前の祭礼の様子を記録した貴重な8ミリフィルムの映像から大きさや細部の仕様、装飾などを読みとつてこれを図面化。そうして仕様を決定しました。特にこだわったのは、漆塗の面積と鎌金具の面積のバランス。過度な金具を取りつけず、適度に黒漆や朱漆を見せる面積をつくつて、金具の点数を減らしています。

そのかわりに、金具一枚一枚を通常の倍の厚さの地金で製作し、漆と金具のコントラストで重厚感を引き出しました。

堂の左右に取りつけられる堂羽目彫刻には、櫻の桟目の厚板に神社に残る江戸時代の祭礼を描いた大絵馬から十三体の山車人形を彫り出しました。また、堂を開く回廊の四隅には、この宮神輿が多くの方々の支えで製作に至つた経緯に思いを馳せ、力神像（縁の下の力持ち）を配置しました。

亡くなれた惠川義浩彌宜が「宮神輿を現したい」と熱く語っていた思いに応え

られたのか？　今はまだ分かりませんが、この宮神輿が現存する九体の山車人形と共に赤坂の町のシンボルとなり江戸時代に勝る祭礼へと発展して行くことを願いながら、一緒に見守つていきたいと 思います。

浅草徒然につき

復元記念 泣き相撲 四月二十九日

今号の「みやもとだより」は諸事情により通常より遅れての発行となりました。毎号楽しみにして頂いている読者の方々にはご心配をお掛け致しました。

さて今号取り上げた左義長まつりが土地の新参者によつて行われた祭というのは興味深いケースです。現代の生活では人々の生活圏は広がり、一生ひとところで暮らすといつまり新住民が増加しているということです。そんな中で、旧住民が新住民を上手く受け容れた土地の方が祭礼が盛んな印象を受けます。旧来の伝統をそのままとはいかなくても、祭礼の準備から片づけまでを共有することで絆が強まり、新しい息吹が入り、次世代のコミュニティが形成されていくかもしれません。世界的に排外的な動きの広がる昨今。まずは自分の町から違ひを乗り越えていきたいものですね。

この日に特設される土俵に上がるのは、まわしを締めた「組ませ役」に抱かれた赤ちゃんたち。行司の掛け声は「のこつた、

のこつた！」ならぬ、「泣け泣け泣け泣け！」土俵の上で泣き声を競います。行司の掛け声に先に泣き出す赤ちゃんがいりますかと思えば、全く動じず泣かない赤ちゃんがいたり……。なんとも微笑ましい春の恒例行事です。

代表取締役社長

宮本芳彦

日本各地に古くから伝わる風習「泣き相撲」。赤ちゃんの健康な成長を願い、一歳前後の子どもの泣き声を土俵で競う、風変わりで微笑ましいこの行事が、浅草でも一九八六年から行われています。会場となるのは、浅草寺本堂裏にある九代目市川團十郎「暫」銅像の前。像となつている、歌舞伎十八番のひとつ「暫」の鎌倉権五郎は、まだ前髪のある、豪快で力強い青年です。彼のようにたくましく育つてほしいという願いが込められています。

まわしを締めた「組ませ役」に抱かれた赤ちゃんたち。行司の掛け声は「のこつた、のこつた！」ならぬ、「泣け泣け泣け泣け！」土俵の上で泣き声を競います。行司の掛け声に先に泣き出す赤ちゃんがいりますかと思えば、全く動じず泣かない赤ちゃんがいたり……。なんとも微笑ましい春の恒例行事です。

車など車両の往来が増し、祭礼で山車を曳くこ

株式会社宮本卯之助商店
企画広報室
〒111-10035 東京都台東区西浅草二十一 電話 (03)3384-4122-41
www.miyanoto-unosuke.co.jp